

なぜ、マタイでは「14代」が強調されているのか

【聖書箇所】マタイの福音書 1章 1～17節

ベレーシート

●イエス・キリスト(イエシュア・ハマシアッハ)の誕生を告げるマタイの福音書の中に、特に、系図の中に大切なメッセージを伝える象徴的な数字が出てきます。その数字とは、「14」です。この数字が何を意味するのか。もし「14」という数字が象徴としての数字であるならば、そこに込められている深い意味が隠されているはず。そしてそれを書いたマタイという弟子は、その数字を使うことで、それを読む人々に隠されたある重要なメッセージを告げていることとなります。

1. マタイがこだわった「14代」の「14」という数に込められた意味

●マタイの福音書 1章 1節と 17節には次のように示されています。

【新改訳 2017】

1:1 アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図。

1:17 それで、アブラハムからダビデまでが全部で**十四代**、ダビデからバビロン捕囚までが**十四代**。バビロン捕囚からキリストまでが**十四代**となる。

●しかしこの系図を正確に調べていくなれば、決して **14代**という枠には収まることはできないのです。もっと多くのダビデの子孫がこの系図に入って来なければなりません。ところがマタイは、アブラハムから始まってイエス・キリストに至るまでの系図を、意図的に十四代ずつに区切って三つの区分にしているのです。とすれば、そうする意図は何なのでしょう。ここに「14」という数に象徴的な意味合いが込められているのです。

●聖書の中で「14」という数字が出て来る箇所があります。ヤコブがラバンの娘レアとラケルを自分の妻として娶るために 14年間、一人につき 7年間、ふたり合わせて 14年間を無償でラバンに仕えたという話です。確かに「7」は「完全数」ですから、ヤコブは二人の妻のために完全な代価を払ったのだと言われても大して驚きません。新約では、使徒パウロがローマ行き船に乗っていたときに、暴風に遭い、船が難破して 14日間漂流したという話があります。つまり、二週間、何も食べたり飲んだりできない日々が続いたことが「使徒の働き」に記されています。確かに長い漂流ではありましたが、この場合も 14日間という数字に隠れたメッセージ性があるのかないのか、今のところ分かりません。しかし今、ここで注目しようとしているマタイの福音書の 1章の「14」という数字は、マタイが特別にこだわり、特別に意識して記した隠されたメッセージとしてのシンボリックな数なのです。

●マタイの福音書が記す系図の中には、多くの名前が登場します。アブラハムから始まって、イサク、ヤコブ、ユダとつながっています。ここにはヤコブの 12人の息子の中で**ユダ**の名前だけが記されています。

そしてそのユダから出てくる人の名前が記されて、第一区分としてはダビデにまで至っているのです。ここには、かつてイスラエルの人々をエジプトから導き出した偉大な指導者モーセの名前はありません。また、約束の地カナンへと侵入して、そこを占領したモーセの後継者であるヨシヤの名前もありません。また、最後の士師であり、預言者でもあったサムエルの名前もないのです。なぜでしょう。その理由は、彼らがユダの子孫ではないからです。

●さて、アブラハムからダビデにまで至る系図の中で(2~6節)、他の人とは異なった表現で記された名前があります。それは6節の「**ダビデ王**」です。他の人々はただ名前だけが記されているのに、ダビデだけが特別に「**ダビデ王**」と記されているのです。「**王**」という称号がつけられているのです。これはマタイが意図的につけたものとしか考えられません。ギリシア語の「王、王の統治、王の支配」を意味する「バシリュース」(βασιλεὺς)ということばが、ダビデにつけられて「ダビデ王」となっているのです。

●ダビデという名は、ヘブル語で見ると、先から読んでも後から読んでも、「トマト」「山本山」のようにシンメトリックな三つのアルファベットが並んでいます。つまり、

「ダーレット」(T)+「ヴァーヴ」(I)+「ダーレット」(T)です。

このことから、ヘブル語ではTITとなり、正確な表記は「ダーヴィッド」と表記されます。英語ではDavidですが、日本語訳では一般的には「ダビデ」と表記されています。

●ヘブル語の場合には、アルファベットがそのまま1, 2, 3・・・という数を表わすことから、「ダーレット」(T)は4、「ヴァーヴ」(I)は6、そして「ダーレット」(T)は4ということで、その数を合計すると4+6+4=14となるのです。マタイの福音書1章の系図が**14代**ずつ区分されているのは、ダビデ、しかも「王としてのダビデ」、「ダビデの子孫」が意識されているのです。あのダビデ王のような方が、王としてこの世に生まれたことを宣言しているのです。しかも、その王(メシア)となるべき方は「イエシュア」だということを強調しているのです。

●ダビデは旧約時代において、輝かしい神の王国を築いた理想的な王です。イスラエルの王制の理念は、他の国とは異なり、王はあくまでも真の王である神の代理でしかすぎないのですが、その代理的王としてきわめて神のみこころにかなった人物なのです。神はこのダビデを通してイスラエルに神ご自身の支配(統治)を実現なさいました。ダビデの時代はイスラエルの歴史において最も栄えた時代、興隆をきわめた時代でした。それが**第一区分**です。

2. 神の王国の歴史(第一から第三区分の歴史の特徴)

●神はアブラハムを選び、召し出して、彼を通してすべての民が祝福を受けることを約束されました。また、アブラハムに多くの子孫を与えること、またカナンの地を与えることも約束されました。神はその



約束を少しずつ準備していられました。ヤコブとその家族をエジプトに移り住ませてから 400 年間に、何百万人とその数は増え広がりました。そして神はエジプトから彼らを救い出して、彼らをご自分の民としたのです。シナイ山のふもとで、神とイスラエルの民は合意に基づく契約を交わし、神はイスラエルの神となり、イスラエルは神の民となったのです。そして、神が彼らの王として統治するために、彼らが神の民としてふさわしく生きられるように、神の律法を与えました。神が王としてイスラエルの民を治めるために、以下の三つのことが不可欠です。

王の統治の要素

①王の**民**の存在が必要です。それはクリアしました。エジプトで奴隷となつて苦しんでいたイスラエルの人々を、神は救い出して合意の元で神の民となることを約束したのでありますから。

②**領土**については、やがてヨシュアを通して与えられます。領土のない支配はあり得ません。

③神の定めた**律法**の賦与です。この律法は王の法であり、王の憲章です。これがなければイスラエルの民は烏合の衆でしかありません。



●特に民が神の法に基づいて生きるとき、民はこの世において神をあかす偉大な民となるはずでした。ところが、時代が進むにつれて、イスラエルの民は、他の国と同じように、自分たちも人間の王を立てたいと願ったのです。周囲の国々との戦いに備えて、いつでも戦える人間の王が必要だと考えたのです。最初は、預言者のサムエルは神が王としてイスラエルを治めているのにということで受け入れませんでした。神はサムエルに民の要求を受け入れるように指示しました。と同時に警告も与えたのです。つまり、人間の王を立てるということは、その王にしたがって戦う兵士に徴兵されるのは、あなたがたの息子たちだよ、また立派な宮殿に住む王のその王宮やそこで働く多くの人々のために、多くの税金を支払うのはあなたがただよ、それでもあなたがたは人間の王を立てることを望むのかと。人々はそれでも欲しいということで、神は許可したのです。しかし、イスラエルに王制を導入するにあたって、イスラエルの王はあくまでも神の代理者であるという厳しい条件が与えられました。

●ダビデという人はイスラエルにおいて理想的な王となり、神が約束されたカナンの地をイスラエルに従わせ、ダビデの息子のソロモンの時代には、神がアブラハムに約束された土地をほとんど手に入れたのです。ダビデの治世はイスラエルの時代の中で最も興隆した時代でした。ダビデもそして続くソロモン(その半生のみ)も神の律法にしたがって歩んでいたのです。ところが、ソロモンの治世の後半から少しずつ、イスラエルは神の律法から自由になることを選び、神の王国としての機能不全を引き起こします。そしてやがて衰退へと下降線をたどるようになり、やがては神から与えられた国を失い、また神を礼拝する神殿も焼き払われます。人々はバビロンの奴隷となり、最初は有能な人々から連れて行かれ、その後大勢の人々

が連れて行かれました。これが**第二の区分**です。この時代にイスラエルの王制は完全に崩壊しました。

●**第三の区分**は、バビロンの捕囚となったユダ族の民がそこで三世代に渡って、神から与えられた律法のすばらしさに目が開かれていきます。詩篇 1 篇や詩篇 119 篇は、まさに神の民が神の律法(トーラー)のすばらしさに目が開かれた喜びを表現しています。たとえば、119 篇 47,48 節「私は、あなたの仰せを喜びとします。それは私の愛するものです。私は私を愛するあなたの仰せに手を差し伸べ、あなたのおきてに思いを潜めましょう」とあります。「思いを潜める」(「スィーアツハ」 נִיָּצַח)とは瞑想するという意味の用語です。

●このようにバビロン捕囚の期間は、神の民が神の律法のすばらしさに目が開かれて、神の民としての機能を回復していきます。その霊的なエネルギーは「ユダヤ教」と呼ばれる新たな神の民としての形をなしていきます。これが回復へと向かう**第三の区分**です。しかしながら、神の統治としての「領土」が回復されなかったことと、もうひとつは神の律法が人間的解釈によって、本来の意味を歪められてしまったことによって、回復の道はとどめられていたのです。そこに回復のための最後の切り札として、イエス・キリストが誕生してくるのです。

●つまり、イエス・キリストの誕生はイスラエルのまことの王(メシア)として国を再興するために来られた方であるというのが、マタイが最も強調したいメッセージと言えるのです。マタイの福音書はユダヤ人向けに書かれた福音書です。ヘブル語が理解できる人々なのです。マタイが **14 代、14 代、14 代**とその数にこだわって三つの区分に分けたのは、イエス・キリスト(=イエシュア・ハマシーアツハ)がダビデ王の子孫として来られた王であること、ダビデに勝るまことの王であるという象徴的メッセージが込められているのです。

3. イエシュアは王として何をされ、何を語った(教えた)のか

●イエシュアが公の生涯へと入られた時、最初に語ったことはなんだったのでしょうか。それは「悔い改めなさい。天の御国は近づいたから」でした。イエシュアは預言者たちが語ったメシア王国(天の御国)を実現するために来られました。マタイの福音書はユダヤ人たちに向けて語られましたので、「神」ということばを使わずに「天」ということばを代わりに使いました。これもユダヤ人を意識した配慮です。「天の御国」とは、「神の国」と全く同じことを意味します。「天の御国が近づいた」とは神の統治、神の御支配が本来の形でなされる時が近づいたことを示す呼びかけの表現です。

●前にも述べたように、神の統治には三つのことが必要でした。「民」の存在、そして王が民をご自分の民として治めるための法としての「律法」、そして「領土」の三つです。三つ目の領土は、イエシュアの時代には奪回されませんでした。神の回復のわざとしては、イスラエルの民をご自身の民として整えることから始められました。具体的には、新しいメシア王国に住む民の持つべき法から教えられました。5~7 章の山上の説教はその法についてのイエシュアの教えです。長い間、神の法である「律法」は人間の解釈に

よって歪められていました。それゆえ、イエシュアは本来神が意図した法の解釈をし、その律法に基づいて生きるべきことを求めたのです。

●ですから、イエシュアは律法を廃棄したのではなく、その正しい解釈を語りました。「わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。まことに、あなたがたに言います。天地が消え去るまで、律法の一点一画も決して消え去ることはありません。すべてが実現します。ですから、これらの戒めの最も小さいものを一つでも破り、また破るように人々に教える者は、天の御国で最も小さい者と呼ばれます。」(マタイ 5:17~19)と語られました。そしてイエシュアは続いて「昔の人々に・・・してはならないと言われているのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います」と逸脱してしまった神の律法の正しい解釈を語ったのです。

●王が権威をもって統治されるためには王の法が必要です。イエシュアは、まず王である神の法の完全な成就に向けての改善からなされました。そしてさらには神の王国とはいかなるものか、単なる概念ではなく、生きた神の支配であることを示すために多くの奇蹟をなされたのです。それはすべて本来の神の御支配を回復するためです。

●また、天の御国について多くのたとえを用いて神は語られました。その中には、神のご支配の特徴やこれからの進展について、またそこに入って住むことの幸いを語られました。人々はその権威あることばに驚きを示しました。その驚きは神の支配の中に生き、そして神の権威が与えられている現実をイエシュアのうちに見たからです。この現実を私たちが経験するためには、神から与えられる多くの恵みが必要なのです。私たちはイエシュアが来られた目的にしたがって、神の国と神の義をなによりも求めなければなりません。神の目に見える現実的な御支配と、神との生きた親しいかかわりを意味する義をなによりも、第一に求めなければならないのです。なぜなら、そこに神の力と権威が臨んで、この世に神を証しすることができるからです。

●イエシュアが来られたのは、王である神が与えた律法を廃棄するためではなくて成就するためでした。ですから、神の律法に従う力が必要です。しかしそれは今やすでに聖霊によって備えられているのですが、まだ種のような働きです。しかし、「求めなさい。求め続けなさい。そうすれば、必ず、与えられます。探し続けなさい。そうすれば、必ず、見出します。たたきなさい。そうすれば、必ず、開かれます。」と主は約束しておられるのです。天の父は与えることを喜びとする父です。しかし、ここでイエシュアは「求めること、探すこと(尋ね求めること)、たたくこと」が大切であることを強調しておられるのです。

●イエシュアはしばしば天の御国のたとえ話をされるときに、繰り返し、繰り返し、「耳のある者は聞きなさい」とか、「聞き方に注意しなさい」と言われました。なぜなら、それに関心を持つ者に神はさらに多くの深いことを教えられるからです。反対に、関心のない者に対しては神の国の奥義は閉じられているのです。ですから、「求め続けなさい。探し続けなさい。たたき続けなさい」という求道心を煽っておられるのです。そして求める人には、神の恵みによって、さらに多くの霊的な光が与えられ、「心を尽くし、思いを尽くし、力を尽す者に」、You shall love God. 「あなたは神を愛するようになる」者としてくださるのである。ただし、完全な神の国の現われの時には、「復活のからだ」(御霊のからだ)が与えられるので、御国の

栄光を味わうことができるのです。

付 記

●今回は扱いませんでしたが、マタイの1章1節にある「アブラハム、ダビデ、イエシュア」の三人に共通する事柄があります。その共通する事柄とは、「登った、上った」(「アーラー」 אָרָר)ということです。どこに上ったのかといえば、それは「エルサレム」です。そこは神のご計画が完成される場所です。王なるメシアが全地を治める中心となる地です。このことも「14代」の中に含まれてもよいことなのではないでしょうか。マタイは「14代」を強調することで、ダビデの子孫であるイエシュアのことを指し示しているのです。

銘形 秀則

2019.10.15